

俊乗房重源の入宋と技術移入

青 木 淳

鎌倉時代、俊乗房重源（一二二一—一二〇六）を中心とする東大寺復興造営は、わが国における中世文化のさまざまな側面に影響を及ぼした。ことに重源による勸進活動は、単に民衆への淨財勸募に留まらず、東大寺をはじめ各地の別所の造営や修築、灌漑、築港、さらには中国大陸への材木の施入など実に多彩な職能性を見せる。⁽¹⁾

これまでに重源の勸進活動に関しては、小林剛氏をはじめとして仏教史あるいは美術史などさまざまな分野から、その多様な宗教者としての実像が明らかにされつつある。そこで小稿では、とくに重源の入宋とそれを契機としてわが国へ伝えられた大陸からの技術移入の問題について、いくつかの新たな視座を交えつつ言及を試みたい。⁽²⁾

一 勸進聖の職能性と入宋の問題

東大寺の復興造営では、大仏の修復や大仏殿基壇や回廊の制作にあたり、宋人鑄物師の陳和卿（生没年不詳）ならびに

石工の伊行末（？—一二六〇）といった人物を統領とする職工人集団が大陸より招聘されたことは周知のとおりである。かれらの大陸における活動については今日ではまったく知るすべを得ないが、みずから「入唐三度」と称している重源をして考えるならば、彼の入宋時、あるいは、入宋にあたり滞在していた筑前（博多津）⁽³⁾周辺での情報が陳和卿等の登用の道を開かせたと考えられる。

しかしながら、この重源入宋の問題は、山本榮吾氏をはじめめとして、その入宋自体を否定、ないしは疑う向きもある。すなわち、それらは高野山延寿院梵鐘銘や『玉葉』などの記事が、いずれも重源による自称「入唐」であることなどを論拠とするものであった。⁽⁴⁾

しかし、その一方で鎌倉時代における東大寺大勸進職の歴代が入宋僧あるいはその法系に連なる人物で占められていること、醍醐寺経藏への宋版一切経の施入（『作善集』・現存）、先にあげた重源によって行なわれた阿育王山舍利殿造営にあ

たり東大寺造管科である周防の杣よりの用材施内(『作善集』)、また近年調査が行なわれた京都・遣迎院阿弥陀如来立像の像内納入品(結縁交名)からは、明州での重源・栄西の出会い(『元亨釈書』重源伝)を裏付けるように兩人の名が並記されたものが確認されている(遣迎院交名⑤―1)。

こうした一連の事績を考え合わせると、重源ならびに栄西という中世東大寺における歴代大勸進職の入宋体験は、東大寺勸進事業における大陸の技術ならびに諸文化の移入という必用性を背景として、それは彼らの勸進職就任を支えた、いわば必須の基底条件であったと考えることはできないだろうか。

二 快慶作例にみる宋朝様式の影響と重源

鎌倉時代の彫刻や建築の特色を考える際に、われわれはしばしばその華やかな装飾性や機能性という問題について、当時大陸で流行していた宋朝様式の影響というキーワードによってその多くを語ってきたように思われる。実際に重源の『作善集』には「播磨并伊賀丈六／奉為本様画像阿弥陀三尊一鋪 唐筆」という記事もみられ、この重源創建の播磨別所(浄土寺)ならびに伊賀別所(新大仏寺)に造立された丈六の阿弥陀三尊像が記事のとおり唐(宋)筆のものであったということは、現存する快慶作の播磨浄土寺諸尊などをみても明

らかである。

さらに近年、この播磨浄土寺の阿弥陀三尊尊造立の粉本に関する山本泰一氏の研究成果が報告されている(6)。また先の『作善集』の「唐筆」の意味するものについて、かつて倉田文作氏は、快慶作例は一般に南宋仏画の影響を受けているとされているが「実のところ(快慶作例の)かたちの特色は(宋画)より高麗画に近く、重源上人の提示した『唐本』は高麗画ではなかったかと予想される」と述べており、この意見は外観を拝するかぎりにおいて肯首さざるを得まい。

山本氏の研究は、愛知・西方寺伝来の阿弥陀三尊来迎図と播磨浄土寺像との図像学的な綿密な比較分析を中心に行なわれたもので、木彫像の粉本に関する新たな視点を提起したこととなるが、この西方寺画像も制作年代が果たして快慶が活躍した一二世後半以前に遡り得るか、またその製作地についても南宋に限定することが可能か、さらにこの画風をみるかぎり高麗仏画の影響を受けているのではないかという問題点が残されているように思われる。ただし、快慶作例が高麗仏画を粉本とする説についても、現在までに一二世紀後半までの紀年銘をもつあの装飾性豊かな高麗時代の阿弥陀三尊画像は確認されておらず、こうした山本氏などの報告を契機として、宋と高麗の仏画に関する調査と研究の進展に今後期待したい。

三 伝重源請来、二尊院所蔵浄土五祖像のことなど

重源の入宋の問題に関して検討する過程で、もう一点気になるのが現在、京都・二尊院に伝来する浄土五祖像である。

この浄土五祖像は『法然上人行状絵図』の伝えるところによると、「俊乘房重源入唐のとき、上人仰られていわく、唐土に五祖の影像あり、かならずこれわたすべしと。これによりて渡唐の後、あまねくたづめもとむるに、上人の仰たがはず、はたして五祖を一鋪に図する影像を得たり。重源いよいよ上人の内鑑冷然なるをしる。（中略）されば道俗貴賤かの五祖の真影を拜していよいよ上人の徳に帰し、ますます念仏の信を深くしけり。当時二尊院の経蔵に安置するは、かの重源将来の真影なり」（第六）と示されたものに比定され、南宋時代の作品として重要文化財の指定を受けている。

この五祖とは、源空がその法系と相承について『選択本願念仏集』（第一）で提唱した唐から宋代にかけての中国浄土教の曇鸞・道綽・善導・懷感・少康という五人の高僧を示すものであるが、現在までにこの二尊院の五祖像のような構図の高僧画像は大陸では確認されておらず、裏辻憲道氏の研究によると、この中で善導像のみを重源が請来した可能性はあるが、こうした五師一幅の画像がこの時期、わが国にもたら

された可能性はきわめて低いといわざるを得ない。⁽⁸⁾

ただし、滋賀・玉桂寺阿弥陀如来立像や阿弥陀寺阿弥陀如来立像、奈良・興善寺阿弥陀如来立像など初期の源空教団が造立した仏像の多くが、重源と密探な関係にあった快慶ならびにその工房で製作されたことなどを考え合わせると、絵師や仏師など中世の職工人たちの多くがその教団に接近していたこともほぼ間違いないであろう。そうした「場」でこの五祖像なども製作されたものと考ええるほうが、今日ではその画風や描写などをみても妥当であろう。⁽⁹⁾

おわりに

入宋僧たちの大大陸での活動は、かつて森克巳氏が齟然や成尋らの事績から指摘したように「求法」「巡礼」という目的に代表されてきたが、とくにこの重源や榮西の入宋をみてゆくと、わが国における「勸進」の延長線上に大陸での勸進事業があったものと考えてみてはどうだろうか。⁽¹⁰⁾

小稿では重源の入宋とわが国への技術移入の問題に関わる、いわば前史的部分をかいつまんで述べてみたが、今後、現在筆者が調査を進めている山口県徳地町における東大寺の用材伐採に関係する坂落遺跡、あるいは関水遺跡などの調査は、将来的に重源による技術移入の問題をより実証的な視点から指摘しうるものと思われるが、これはまた機会を改めて

考えてみたい。

- 1 小稿では重源関連の資料は小林剛編『俊乘房重源資料集成』(昭和四〇年三月) 参照。重源は勳進聖として生涯に関わった作善を建仁三年(一一〇三)頃「南无阿弥陀仏作善集」として纏めている。このなかで重源は「大唐明州阿育王山/渡周防国御材木奉起立舍利殿/為修理又奉渡柱/南无阿弥陀仏之影木像画像二鉢」と見えるように、大陸における寺院の造営事業にも関係していたことが知られる。
- 2 小稿では小林剛『俊乘房重源の研究』(昭和四六年六月 有精堂刊)、南都仏教研究会編「重源上人の研究」(昭和三〇年七月刊)、「仏教芸術」(第一〇五号 特集・俊乘房重源と美術 昭和五一年一月刊)などの研究成果を中心に参照した。
- 3 陳和卿の事績については岡崎讓治「宋人大工陳和卿に就て」(『美術史』第三〇号 昭和三三年九月)、伊行末については川勝政太郎『日本石材工芸史』(昭和三二年一月 綜芸舎刊)などを参照。陳和卿には陳仏寿というが弟が、また伊行末には伊行吉という息子がいたことが伝えられている。
- 4 山本榮吾「重源入宋伝私見」(『日本歴史』第一九九号 昭和三九年二月) 参照。
- 5 拙稿「重源と榮西―京都・遣迎院阿弥陀如来像への結縁をめぐって―」(『宗教研究』六八―三三)、「快慶作遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名」(『仏教史学研究』三八―二) 参照。また東大寺別堂となった空海・喬然がいずれも入唐(宋)僧であったことや、平安時代初期の地震により大仏の首が転落した際の修理勸進に関わった真如法親王も、後年やはり大陸に渡っていることも気になるところである。京都府舞鶴は、真如法親王の渡唐伝承地と伝えられるが、同地の松尾寺、金剛院などの寺院には重源と関係の深い快慶作の仏像が伝来していることも付記してきた。

俊乘房重源の入宋と技術移入(青木)

- 6 「新出の唐本阿弥陀三尊来迎図について―快慶作 播磨浄土寺阿弥陀三尊像の本様か―」(『金剛叢書』第一七号 平成二年六月) この問題についてもう少し言及するならば、すでに重要文化財の指定作品の中でも、京都・知恩院阿弥陀浄土図(南宋)、京都・禅林寺釈迦如来像(元)などはいずれも高麗仏画の特色が如実にみられるもので、再検討の必要があろう。(毎日新聞社刊『重要文化財』八 絵画2 昭和四八年七月参照) 倉田文作「高麗仏画によせて」(『高麗仏画』昭和五六年二月朝日新聞社刊所収) 参照。
- 8 裏辻憲道「法然上人と重源上人―統善導像の一考察―」(『仏教文化研究』第一〇号 昭和三六年 月)、蓮実重康「祖師像制作の意義と二尊院の浄土五祖像」(南都仏教研究会編「重源上人の研究」所収) 参照。
- 9 拙稿「仏師快慶と法然―中世職工人研究の新視点―」(『印度学仏教学研究』第四四卷二号 平成八年三月、同「祖師図像をめぐる覚え書き」(『西山学会年報』第七号 平成九年九月刊) など参照。

〈キーワード〉 重源、高麗仏画、入宋僧、快慶

(日本学術振興会特別研究員・博士(学術))